

## 体育・保健体育科における 思考力・判断力・表現力

平成22年度の本学校園研究紀要では、これからの体育学習においては、認識学習がさらに重視されていくこと・またそれは子どもたち個々の認識を形成する過程と集団を形成する過程とが、一つの授業の中で同時に進行していくことでもあることを指摘した。この主張の背景には、「学習とは、所与の知識の個人的獲得ではなく、学習者が他者とかかわりのある活動を通して、意味を構成していく社会的行為である」（広石 2005）とする構成主義的な学習観があるといえる。本稿では、本学校園の体育・保健体育科がめざす思考力・判断力・表現力の育成の背景にある学習観に目を向けたい。

佐藤学の「対話的实践としての学び」論によれば、「学び」とは、対象世界との出会いと対話による「世界づくり」と他者との出会いと対話による「仲間づくり」と自分自身との出会いと対話による「自分づくり」とが三位一体となって「意味と関係の編み直し」が遂行されることであるという（佐藤 2000）。そしてこれを体育科・保健体育科の学習に即していえば、以下のような学びの構造がみえてくるという（岡野・伊藤 2011）。すなわち、①対象世界との出会いと対話による「世界づくり」とは学習者が運動に参加することを通して、その運動が発生して以来今日に至るまで人々が享受してきた本質的なおもしろさに気づいていくことであり、②他者との出会いと対話による「仲間づくり」とは仲間と共に課題を探究することを通して課題の質を高めつつ学びを共有していくことであり、③自分自身との出会いと対話による「自分づくり」とは客体つまり道具としての身体を用いて身体技法を習得しようとする体験と、主体つまり「自分はこのように動きたい」という意志をもった身体として課題を探究しようとする体験とを行き来しながら学習課題である身体技法を形成していくことである。この①②③が「私」である学習者を中心として三位一体となって展開される。

このような学びにおいて、学習者は、運動が内包する本質的なおもしろさを探究する。そのためには、その運動がもつ身体技法を習得することがどのようにその運動の楽しさを形成していくのかを理解し、習得した身体技法を状況に応じて活用できる（このとき思考力・判断力をはたらかせる）ようになる必要がある。また、仲間と共に課題を探究するなかで、運動に対する認識や情報を豊かに交換し（このとき表現力をはたらかせる）共有することも望まれる。

これまで、本学校園の体育・保健体育科では上記の②③に焦点をあてて授業研究をすすめてきた。今後の授業研究では、そうしたこれまでの実践の成果の上に、①をどのように積み上げていくかが課題となっていくと思われる。「その運動の本質的なおもしろさを学習者がどのように見出していけるようになるのか」「その運動のおもしろさを追求するための身体の動き方や動きの組み立て方の意味や必要性を学習者がどのように理解できるようにするのか」といった研究の視点を具体化するための学習過程・活動の場・指導の工夫が求められよう。

松田恵示は、「行動主義的学習観を脱して構成主義的学習観へパラダイムシフトすることによって、社会的な相互作用の中で生まれる「意味」を要として、必要感に基づいて練習し考える学習を積み重ねるからこそ、変化に学び状況に応じて活用できる力を育むことができる」と説き、「体育を学ぶことが、こうして運動やスポーツの意味が分かり、状況に応じて活用できる力が育つことに繋がったときに、体育はまた、体育に留まらない広く社会全般に求められる「生きる力」の育成にも力を発揮する」と述べている（松田 2011）。教科の教育であると同時に教科を超えた人間の教育でもあることを自覚しつつ、今後とも授業研究に取り組んでいきたいと考える。

（共同研究者：島根大学教育学部初等教育開発講座 廣兼 志保）

### 【参考文献】

- 岡野昇（2011）体育における「学び」の探求の移り変わり. 体育科教育59(6):14-17.
- 岡野昇・谷理恵・伊藤茂子・佐藤学（2011）体育における「学び」の三位一体. 体育科教育59(6):32-36.
- 松田恵示（2011）新しい体育の「学び」のパラダイム. 体育科教育59(6):18-22.